



JFC

12月1日

Sudden Fiction Project

高階經啓
hirotakashina

もしあなたがいまここにいたなら。
もしあなたがいまここにいて、思うままに、
かつてあなたがしたように思うままに、
振る舞ったなら、また裁かれるだろう。
異端と烙印を押され再び処刑されるだろう。
おおジーザス、おおジーザス
世界はあなたの名で満ちてるけれど、
この世界はあなたを受け入れることはないだろう。

街角でいつもギターをかき鳴らす青年の歌を、それまでちゃんと聞いたことはなかった。その日も別に歌を聞きたくてそこにいたわけではない。待ち合わせをすっぽかされて、連絡も取れず、かといって帰ってしまうほど腹をくくれず、ぐずぐずと18丁目と5番街の交差点に立ちつくしていたのだ。いつも通る道なので、そこにその黒人の青年がいて、毎晩のように弾き語りをしていることは知っていた。でも、ただ通り過ぎるだけなので何を歌っているかまで気にとめたことはなかったのだ。

聞いていて全くその通りだと思うのだけれど、この街で、このガチガチに原理主義的なクリスチャンの多いこの街で、黒人青年がここまであからさまにクリスチャニティへの批判をするのは、傍目にもすごくあやうく見えた。もちろん彼には彼の考えがあるのだろうし、誰が何を歌おうが自由といえば自由なのだが、もしも単に考えが至っていないのならあまりにも無防備だ。こういうのは醒めた考え方かも知れないが、青年がそこまでのリスクを犯さねばならない理由が分からなかった。

青年が歌い終えたタイミングでコインを放り込み、そして声をかけた。ふだんなら絶対にそんなことはしないのだが、その時はふと口をついて出るようにして言った。

「ここでそんな歌を歌って危くないの？」

「ありがとう」青年はコインに対して感謝した後でちらっとこっちを見て、それから通りに目をやり返事した。「誰も聞いていないから」

「そんなことはないだろう」と言ったものの事実、今日まで自分も聞いていなかったのだから、その見解が間違いとは言えない。「じゃあ、どうして歌うんだ？」

「彼に歌っているんだ」

「彼？」

青年がひょいと肩をすくめる。そうか。そう歌っているもんな。

「『もしあなたがいまここにいたなら』か」

「そう。『もしあなたがいまここにいたなら』」

「もし彼がいま本当にここにいたら何て話しかける？ その、君の歌みたいなのじゃなく、もっとなんて言うか個人的にさ」

「個人的に？」青年が少し驚いたように大きく白目をむく。それから足元を見つめ照れたように笑う。「無理だよ、個人的になんて」

意外に幼いその表情に驚く。そう。青年はまだまだ幼いのだ。

「じゃあ、おれを彼だと思って話してみようよ」

青年はまたちらっとこっちを見てそれからうんざりしたような顔をした。

「勘弁してくれよ。ドラマスクールじゃないんだから」それから言葉を続けた。「天国が、死んだ後の国が本当にあるのかどうか尋ねるな、たぶん」

「おいおい。そいつはまたさっきの歌みたいじゃないか」

「そうじゃない。そこで、彼が、彼と言ってもその、彼、つまりあんたじゃなくだ、おれの彼、おれの恋人が元気にしているかどうか聞くんだ」

「ああ。気の毒に。亡くなったのか」

「うん。くだらない理由で死んだそうだ」しばらく口をつぐんで唾を吐き捨て、それから言った。「黒人だからな。危険な場所に送り込まれて」
「前線……戦争か」
「でもそれが理由じゃない。上官のラジコン飛行機を整備していてそれが爆発したんだ」
「ラジコン？」
「上官の趣味の玩具だったそうだ」

しばらく会話が途切れた。
「それを歌えよ。それを歌にしろよ」
「え？」
「そういうことを歌った方がいい」
「ダメだよ。歌になりゃしないよ」青年は目を伏せてそう口にし、二、三度まばたきをし、それから目を上げるとこっちを見つめた。「ジーザス、歌になるかも知れない」
「きっとうまくいくよ」
「ジーザス・ファッキング・クライスト、あんたすげえぜ」
「その通り。ファッキングは余分だけだな」

そう答えて私はその場を後にした。「父よ、なぜ私を見放すのですか」と尋ねたのはかれこれ2000年前のことだ。あれからずっとすっぽかされ続けてている。だから少くくらい好きにさせてもらったって罰は当たるまい。青年はきっとこの国を揺すぶるくらいの歌手になるだろう。

(「異端」 ordered by エルスケン-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

JFC

<http://p.booklog.jp/book/39867>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/39867>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/39867>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.